



ヴェーダ
アヴェスター

辻直四郎 編

世界古典文学全集

3

筑摩書房

ヴェーダ アヴェスター

世界古典文学全集 第3巻

昭和42年1月31日発行

訳者代表 辻 直 四 郎

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式 会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2-8
振替東京 4123 電話 (291) 7651

目次

リグ・ヴェーダの讃歌	辻	直四郎訳	5
アタルヴァ・ヴェーダの讃歌	辻	直四郎訳	105
ブラーフマナ散文の挿話	辻	直四郎訳	131
ウパニシャッド	岩	本裕訳	169
バガヴァッド・ギーター	服	部正明訳	283
アヴェスター	伊	藤義教訳	325
解説			397

ヴェーダ

リグ・ヴェーダの讃歌

現在流布するリグ・ヴェーダ本集（略してリグ・ヴェーダ）は、シャーカラ派所伝のもので、一〇巻に分かれ、一〇一七讃歌に補遺歌一篇を加えて合計一〇二八讃歌をふくむ。第二巻から第七巻までは、古代の祭司詩人の家集ともいふべきもので、本書の中核をなしている。第一巻と第八巻とは、この中核部に追加された部分で、第九巻はソーマ（神酒）に捧げられた讃歌のみをふくんで、特殊な性格をもち、第十巻は最新層を代表する。本書はヴェーダ文献中もつとも古く（おそらく前一二〇〇年ころを中心）かつもつとも重要なもので、パンジャーブへ侵入したアリアン人の宗教・神話・生活態度を伝える根本資料である。当時の宗教は本質的に多神教で、しかも多数の神々は交互に最上級の讃美を受けている。神々の中には、その基礎をなす自然現象を明示するものもあり、すでにその関係があいまいとなったものもあり、抽象概念の神格化と認められるものもある。普通の讃歌のほかに、一見祭式との関係の明瞭でない歌、哲学的思索の進展を示す歌等もあり、内容は多彩である。優秀な讃歌によって神の歡心をかき、その結果として願望を成就し、庇護者たる王侯貴紳から多くの報酬を得るため、詩人のあいだに激しい競争があったらしく、文学的にすぐれた作品が多数に残っている。

リグ・ヴェーダの概要を、抜萃によって伝えることは容易でない。各神格に捧げられた讃歌の数には非常な差がある。約二五〇讃歌をもつインドラ、約二〇〇讃歌をもつアグニの重要性は、数量的に計りえても、インドラとならんで神話界に重きをなすヴァルナの地位

を、その僅少な讃歌数から推定することは許されない。ヴァルナの伴侶ミトラにいたっては、わずかに一篇の独立讃歌を享有するにすぎない。それゆえここでは、できうるかぎり主題の変化に富むこと、代表的あるいは有名な讃歌のうちから、なるべく予備知識を必要としないで理解できるものを取り、選択の基準とした。しかしリグ・ヴェーダの言語は、ヴェーダ語の最古層に属して難解をきわめている。一定の慣用句がくり返されると同時に、詩人は奇警の文句によって人の意表にでることを意図し、率直な表現よりも、比喩・誇張・暗示・省略を好み、神話と人事、天界の現象と地上の出来事との区別をあいまいにしている。神話・語法に対する知識の不足が、理解を妨げる最大の原因をなしているとはいえ、世界各国の専門家の一世紀にわたる努力にもかかわらず、リグ・ヴェーダを満足に解釈できる日はいまだ遠い。訳文のほかに少なくも精密な注釈を必要とする。しかし今は通説の妨げにならぬ程度の簡単な注記をそえるにとどめた。以下の翻訳は原文に忠実なことを期して大部分逐語訳によったが、しばしば生硬かつ難解となったことを遺憾とする。

なお引用に使った三個の数字は、順次に巻・讃歌・詩節の番号を示す。また訳文の補足は角カッコの中にいれ、短い説明は小字を用いて丸カッコの中におさめた。

天地両神の歌（二・一六〇）

天神ディアウスは諸神の父、地神プリティヴィーは万物の慈母として称えられ、ほとんどつねに合同して、ディアーヴァー・プリティヴィーの名のもとに讃歌の対象となっている。

一 天地両神は万物に幸いし、天則を守り、空界の賢者（太陽）を維持す。麗しきもの生む神聖なるこの両界のあいだを、清浄なる神太陽は、掟に従って進む。

二 広く拡がり、偉大にして尽くることなき父と母と（天地）は、万物を保護す。天地は誇り高く美しき婦女のごとし、父〔なる神〕が、美をもつて彼らを装いたれば。

三 両親（天地）の子、車に駕し・浄化の力ありて賢明なるもの（太陽）は、その奇しき力もて万物を清む。彼は、斑ある牝牛（地）と善き種子ある牡牛（天）とより、つねにその澄み輝く液（雨）をしほる。

四 活動力ある神々の中にありてもっとも活動力あるこの神、万物に幸いする天地を生める神、賢慮によりて両界を測れる神は、朽つることなき支柱をもつて、〔天地を〕固めたり。

五 かく偉大なる両神は、讃美せられて、偉大なる名声と、広大なる主権とを、われらに与えよ、天地両神よ。われらつねに諸民の上に拡がり得んがため、讃うべき力をわれらに授けよ。

ヴァルナとミトラ、アーディティヤ神群

ヴァルナはリグ・ヴェーダ神格中もっとも重要なものの一つ。宇宙の秩序・理法の崇高な守護者、欺瞞・虚言に対する峻烈な懲罰者として恐れられる。ミトラは元来「契約」の神で、ほとんどつねにヴァルナに随伴し、僅かに一篇の独立讃歌（三・五九）をもつにすぎない。両神はしばしばミトラ・ヴァルナの名で併称され、アーディティヤ神群の主長と仰がれる。この神群は、両神のほか、アリヤマン（「款待」の神）バガ（「分配」の神）等をふくみ、道徳的・社会的要素を代表する。ヴァルナの起原は、異説が多く不明であるが、その性格は、ゾロアスター教の聖典アヴェスタ中の最高神アフラ・マズダーに比せられ、後世はもっぱら水神とされた。ミトラと起原を同じくするアヴェスタのミスラは、ヨーロッパにまで喧伝されたミスラ教の主神となったが、インドにおけるミトラは独立性に乏しく、後に太陽・昼に関係をもつにつれ、ヴァルナは月・夜に関係するにいたった。

ヴァルナの歌

その一（一・二五）

一 たといわれら、部族の民が〔王命に背く〕ごとく、神ヴァルナよ、

日にけになが^な旋^まを冒^めすとも、

二 われらを、怒れるなが必殺の武器に委^{ゆだ}ぬることなかれ、不興^{ふきよう}のなが激怒に委ぬることなかれ。

三 われら願^{ねが}わくは、車を御^ごする者が繋^{つな}ぎし馬を解くことく、ヴァルナよ、讃歌もてなが意を解かんことを、憐愍^{れんみん}を得んがために。

四 怒りを解くわが〔讃歌は〕、実に遠く飛ぶ、至福を求めて、あたかも鳥がその巢に帰るがごとく。

五 われらいつか、主権いみじき君主ヴァルナを、われらに近く引きよせん、憐愍^{れんみん}を得んがために、遠く見はらかす神よ。

六、両神（ヴァルナとミトラ）は実にこの平等の〔主権に〕到達したり。彼らは注視しつつ、固く旋^まを守る祭祀者に対し、なおざりにすることなし。

七 彼（ヴァルナ）ぞ知る、空中を飛ぶ鳥の過ぎりし跡を。彼は〔空〕海に浮ぶ舟（雲）を知る。

八 固く旋^まを守る神（ヴァルナ）は、後裔に富む十二月（一年）を知る。彼は知る、それに添いて生れくるもの（閏月）を。

九 彼は広く・大きく・高き風の通い路を知る。彼は知る、〔その風を〕支配するものたち（おそらくマルト神群）を。

一〇 固く旋^まを守るヴァルナは、水流の中に坐せり、賢明なる神は、完全なる主権を行使せんがために。

一一 そこよりして、彼は一切の不可思議なることを、知悉して觀察す、すでに行なわれしことをも、これより行なわるべきことをも。

一二 この賢明なるアーディティヤ（ヴァルナ）は、われらのためなべての日に、よき道を設けんことを、われらが寿命を延ばさんことを。

一三 黄金の外衣をまとい、ヴァルナは美服をつく。その探偵^{たんてい}は〔彼を〕囲みて坐したり。

一四 この神を、欺瞞^{ぎまん}を好む者も欺^{まか}かんとせず、人間の中における加

害者も、陷穽^{くわんてい}を設くる者も。

一五 またこの神は完璧なる尊敬を勝ち得たり、人間のあいだに、かつわれらの腹中に。

一六 わが詩想は遠く行く、牛群が牧場の道にそい行くがごとく、遠く見はらかす神を求めて。

一七 今やわれら両者（詩人とヴァルナ）再び相語らん、いずこより蜜はわれにもたらされしかを、ホトリ祭司のごとく、このいとしき飲料を味わわんがために。

一八 今やわれ、万人の見るにふさわしき神を見んと欲す。その車の地上に〔降るを〕見んと欲す。わがこれらの讃歌を神の嘉せんことを。

一九 このわが呼び声を、ヴァルナよ、聞け。しかして今日われを憐れめ。支援を求めてわれ汝を欲^ほす。

二〇 汝は、賢明なる神よ、一切を支配す、天をも地をも。わが祈願に耳かたむけよ。

二一 われより上方の繩索^{じようさく}を解きあげよ。中央のものを取り除け。下方のものを解きさげよ、われ生き得んがために。

(1) 原語リタ、自然界・祭祀・道德の秩序をつらぬく神聖な理法・真理。

(2) 本初^{ほんしよ}の創造神。

(3) 第二詩節で父と呼ばれたもの。

(4) おそらく天上の大水。

(5) 意味不明。ヴァルナが謂としてくだす水腫病の顯著な症状は、腹部の膨

脹であるから、これに対する恐怖に基づく畏敬の念を指すか？

(6) 水腫病を癒す薬としてのソーマ液。以下最後まで、ヴァルナの宥恕^{ゆうじよ}と繩

索^{さく}（第二詩節注参照）の解除とを主題とする。

(7) ヴァルナが罪ある者を縛めるに用いる綱、原語パーシヤ。

その二(二・二八)

一 アディティの子・詩宗にして自主の神(ヴァルナ)に捧げられたるこの歌は、偉大性により、現存するすべての歌を凌駕せよ、こは祭祀のためことに勝れて喜ばしき神なれば。われは乞う、恵みゆたけきヴァルナのよき名声を。

二 われら願わくは、なが掟に住して幸多からんことを、よき心ばせもて、ヴァルナよ、なれを讀め称えしわれらは、牝牛(光線)に富む曙の近づきに、祭火のごとく、来る日来る日に目覺めつつ。

三 われら願わくは、多くの勇者に富み、大いなる称讃を受くる汝の庇護のもとにあらんことを、ヴァルナよ、指導者よ。汝らは、冒さるることなきアディティの子ら(アディティア神群)よ、われらが伴侶たることを聽許せよ、神々よ。

四 アディティア(ヴァルナ)は配分者として、それら(河流)を流しやりたり。「天上の」河流はヴァルナの天則にそいて進む。それらは疲るることなく、休むことなし。鳥のごとく、速やかに旋回して飛びゆく。

五 われらより罪を、帯紐のごとく解き弛めよ。われら願わくは、ヴァルナよ、なが天則の泉を助長しえんことを。思想を織るわが糸の断たることなかれ。工匠の規矩の時満つるまゝに、毀たることなかれ。

六 われより恐怖を隔離せよ、ヴァルナよ。天則を保持する大王よ、われに擁護をたれよ。仔牛を綱より解くごとく、われより困厄を解き離せ。汝を離れて実にわれは、まばたきすることすらなしえず。

七 武器により、ヴァルナよ、われらを「殺す」なかれ、罪を犯す者を汝が求むるとき、アスラ(ヴァルナ)よ、われらを傷つくる武器により。光明界のそとへ、われら旅だつなからんことを。欠如を遠くとり除け、われら生きえんがために。

八 頂礼の詞はかつて、ヴァルナよ、汝に唱えられたり。今もまた、未来にもまたわれら唱えんと欲す。実になが上に、山上におけるがごとく、もろもろの掟は揺ぎなく安立す、冒しがたき神よ。

九 しかしてわがつくりし負債を免除せよ。王(ヴァルナ)よ、他人のつくりし負債のために、われをして償わしむることなかれ。いまだ輝かざる曙の数は実に多かり。定めよ、ヴァルナよ、それら「多くの曙に」われら生存してあることを。

一〇 王(ヴァルナ)よ、伴侶にもあれ、友人にもあれ、夢に恐ろしきことを心弱きわれに告ぐる者、われを害わんとする盜賊にもあれ、狼にもあれ、汝は、ヴァルナよ、かかる者よりわれらを守れ。

一一 われをして、ヴァルナよ、見しむるなかれ、親愛なる寛裕人の、多くの賜物をもつ友人の窮乏を。われをして、王よ、統御し易き財貨より離脱せしめざれ。——われ願わくは、よき男の子に富み、祭祀の場において、奇特の言葉を宣りえんことを。

その三(五・八五)

一 最高の君主、名高きヴァルナに、崇高・深遠にして・「彼に」好ましき祈禱を高響かせ。その神は大地を太陽のため敷物として剥ぎ上げたり、屠殺者が皮を剥ぐごとくに。

二 彼は木々の間に空間を遠く拡げたり。ヴァルナは置けり、勝利の賞を競走の馬の中に、乳を牝牛の中に、賢慮を心の中に、火を水の中に、太陽を天に、ソーマを山に。

三 ヲアルナは「水」槽の口を下方に向けて、天地・空界に注ぎかけたり(雨を降らした)。それにより万物の王者は地をうるおせり、雨が穀物をうるおすごとくに。

四 彼は地の面、天地をうるおす。ヴァルナが乳を欲するとき、山々は雲を身にまとい、力を誇示する勇士たち(マルト神群)は、「その手

綱を弛む。

五 われ高らかに宣らん、アスラの性をもつ・名高きヴァルナの、この偉大なる幻力を。彼は空界に立ち、あたかも規矩によつてのごとく、太陽によつて地界を測量せり。

六 最大の詩宗なる神のこの偉大なる幻力を、何ものもかつて冒したることなし、輝く水流の注入しつとも、ただ一つの海を水もて満たすことなしという「不可思議を」。

七 ヴァルナよ、款待により結ばれし友、あるいは契約により結ばれし友、あるいはいかなる友に對し、あるいは兄弟に對し、あるいは同部落の住人、同族者または部外者に對し、ヴァルナよ、われらがかつていかなる罪を犯せしことありとも、そを解き赦せ。

八 あたかも賭博者が博奕において欺瞞をなすごとく、「われらが欺瞞を行ないたりとも」、そが意識せられたるものなりとも、あるいはわれらの知らざるところなりとも、それら全てを弛き「結び目」のごとく解け、神よ。しかしして願わくは、ヴァルナよ、汝の親愛たらんことを。

その四（七・八六）

一 この「神の」偉大によりて生類は賢明なり。彼は広大なる天地を分け支えたり。彼は高き蒼穹を遙かにおしかげ、天日を二重におしやれり。また大地を払げたり。

二 しかしてわれはわが身にかくぞ問う、いつの時にかわれヴァルナに親しむを得ん、怒りを解きて彼わが供物を嘉することやある、いつかまた心安けく神の憐れみを仰ぎ得んと。

三 その罪を、ヴァルナよ、探り求めんとして、われはわが身に問い、問いたださんがために賢者たちに近づく。詩人たちは等しくわれにいうかのヴァルナ汝に怒ると。

四 ヴァルナよ、わが最大の罪は何なりし、友なる讚美者を、なれが

殺さんと欲するにいたりしは。そをわれに明らかに告げよ、冒しがたき自律の神よ。われ切になが赦しを乞う、罪なからんと額すきて。

五 父祖の犯せし罪よりわれを解き放せ。われらみずから犯せし「罪」より解き放せ。王なる神よ、牛盗人のごとく「縛められたる」ヴァシシユタを解き放せ、鎖を綱より「解き放つ」ごとく。

六 そはおのが意志ならず、ヴァルナよ、そは過誤なりき。「そは」スラー酒・怒り・ヴィビダーカ・無思慮なりき。年たけし者は、若き者の過ちに責をもつ。眠りすら不正を防ぐものならず。

七 下僕が憐れみ深き「主人」におけるがごとく、われ罪なき者として、烈しき神にかしずかん。部外者を守る神（ヴァルナ）は、思慮なき者を思慮ある者とせり。熱望する者を財貨のために励ます・さらに勝れて賢き「神は」。

八 この讚美は、自律の神ヴァルナよ、よくなが心に留められてあれ。われらが静居に幸いあれ、われらが出動に幸いあれ。——汝ら神々は常に祝福もてわれらを守れ。

(1) 特殊の神の称呼。一般の神（デーヴァ）に比し魔力に富み、恐怖の念を起させる点に特徴をもつ。後にアスラ（阿修羅）は神に對して惡魔を意味する。

(2) 神酒を捧るための植物。

(3) 雨を降らせうとするとき。

(4) 降雨の開始。

(5) 靈感に富む神は、それを人間にも授ける。

(6) 昼間の太陽と夜間の太陽との進行を指す。

(7) この讃歌の作者自身。

(8) 古代の賭博はこの植物の果実を用いて行なわれた。賭博は飲酒・忿怒とならんで罪の原因の一つ。

(9) 罪の範囲は広く、祖先の罪（第五詩節）に對しても責任を問われ、睡眠中にも罪を犯すことがあると考えられた。

その五（七・八七）

一 ヴアルナは太陽のために道を開けり。海原^{うみはら}なす・河川の水は流れ進む、牝馬^{めうま}なす水は、天則を保持し・進発せる競走のごとくに。神は日のために大いなる行路を造りたり。

二 なが息吹きたる風は、空間を吼えわたる、牧に勝ち誇り、意気高ぶる獸（勝ち馬）のごとく。これら高大なる天地両界の間に、ヴァルナよ、汝の好ましき居所はすべて存在す。

三 ヴアルナの探偵は指令を受けて、堅固なる天地両界を見守る。詩人たちは天則を保持し、祭式にたけたり、洞察力ありて、自己の詩想に効驗あらしむる彼らは。

四 ヴアルナは、賢慮あるわれに告げたり、牝牛は三七³³の名を担うと。〔秘〕語を知る者は、秘め事を告ぐるのごとく、それを語れ、靈感ある人として後代の者を援助せんがために。

五 三層の天は彼の中に置かれたり、その下に三層の地ありて六重^{むさ}をなす。熱意ある王者ヴァルナは、天界にこの黄金の轡轡^{しんしん}（太陽）を造りたり、美観を添えんとて。

六 ヴアルナは水中に降りたちたり、白日のごとく、白き水滴のごとく、強力なる獸として。深遠なる称讃を博し、空間を測量し、万有の王者として、幸多き主権を保つ。

七 罪を犯したる者をすら憐れめかしと祈るヴァルナの前に、われら罪なからんと願う、アディティ（「無垢」の女神）の掟を實現しつつ。

——汝ら神々は常に祝福もてわれらを守れ。

その六（七・八八）

この讃歌の作者ヴァシシュタ（あるいはその先祖のヴァシシュタ）

とヴァルナとの親密な関係を、幻想的に回顧し（二一四）、今は失われたこの友情（五）の再びたちかえるよう、詩人は神の赦免を懇請する（六一七）。

一 清らなる・最もいとしき讃歌を、ヴァシシュタよ、憐れみ深きヴァルナにもたらせ。そ（讃歌）は、祭祀にふさわしく・千の賜物を授くる・高大なる牝牛（ヴァルナ）を、われらに向いて導くべきなり。

二 しかして彼（ヴァルナ）と出会いたるのち、われは思えり、ヴァルナの顔をアグニ（火神）のそれなりと。石の中に存する太陽と暗黒とに、その支配者（ヴァルナ）はわれを導かんことを、驚くべき姿を見んがために。

三 もしヴァルナとわれと舟に乗るとき、もし海のただ中を前進するとき、もし大水の波頭を越え行くととき、われら両者は、轡轡（太陽）の上において揺るがんと欲す、美観のために。

四 ヴアルナは実にヴァシシュタを舟にのほせたり。よき業に富む神は、力によりて彼を聖者となせり、靈感ある神は、〔彼を〕讃歌者となせり、日々の好日たらんがために、昼が、曙が、暁が、続かきり。

五 われら両者のかの友誼はいずこに去りゆきし、かつて敵意なくわれらが伴いあいたる友誼は。自律の神ヴァルナよ、なが高層の樓閣に、千個の門をもつが家をわれは訪れぬ。

六 なれにいとしくありながら、ヴァルナよ、なが親しき伴侶、なが友が、なれに対して罪を犯すとも、われら願わくは、なが罪人として、〔罪の果を〕償うなからんことを。罪科を支配する神よ。靈感ある神として、讃美者に保護を授けよ。

七 この堅固なる住居に住みつ、なれを〔讀えんと欲す〕、——ヴァルナのわれらよりその繩索を解かんことを——アディティ（「無垢」の女神）の膝より支援をかり得つつ。——汝ら神々は常に幸福もてわれらを守れ。

その七（七・八九）

水腫病にかかった人が、ヴァルナに赦免を乞う歌。この病患は、罪によってヴァルナの縄索に縛められた結果と考えられていた。

一 ヲアルナよ、粘土の家（埋葬所）へわれ赴くならんことを、王（ヲアルナ）よ。憐れめ、いみじき主権もつ神よ、憐れみ給え。

二 われ、張りつめし革袋にも似て、あたかも蹢躅として歩むとき、石もて武装せる神よ、憐れめ、いみじき主権もつ神よ、憐れみ給え。

三 思慮の欠如のゆえに、われいつしか邪ごとを敢えてせり、清浄なる神よ。憐れめ、いみじき主権もつ神よ、憐れみ給え。

四 なが讃歌者は、水のさなかに立ちつつも、渴きは彼を見いだせり。憐れめ、いみじき主権もつ神よ、憐れみ給え。

五 もしいかにしてここに、われら人間として、ヴァルナよ、神々に非礼を行なうとき、もし無思慮のゆえに、なが規範を冒したるとき、神よ、その罪のためわれらを害うことなかれ。

ミトラの歌（三・五九）

一 「契約の」名にし負うミトラ（「契約」）は、人々をして互いに合意せしむ。ミトラは天と地とを支う。ミトラは瞬きせず、諸民を見守る。グリタ（バターの溶液）にみつる供物をミトラに捧げよ。

二 ミトラよ、なが掟に従いて努むる人をして卓越せしめよ、栄養に富む者として、アーディティア（ミトラ）よ。なが支援を受ける者は殺さることなく、克服せらるることなし。困厄の彼に達することなし、近くよりも、遠くよりも。

三 病患なく、強壯の飲料に酔いつつ、地の面の拡がるかぎり鞏固なる膝もて立ち、アーディティアの掟を固く守りつつ、われら願わくはミトラの好意に住し得んことを。

四 頂礼にふさわしく、仁慈に富むこのミトラ、正しく支配する王者は、促進者として生まれいじたり。われら願わくは、祭祀に値いする彼の好意に、その吉祥なる友誼に住し得んことを。

五 偉大なるアーディティアは、頂礼もて近づかるべし。彼は人々をして互いに合意せしめ、讃歌者に甚だ仁慈なり。最も称讃に値いするこのミトラに、彼の好むこの供物を火中に捧げよ。

六 諸民を維持するミトラ神の支援は、勝利をもたらす。その天的光輝は最も多彩なる名声に富む。

七 その偉大によりて天を凌ぎ、名声によりて地を凌ぐ、広大なるミトラ、

八 援護の力あるこのミトラに、五民は服従せり。彼は一切の神々を支う。

- (1) 恐らく天上の現象。
- (2) ヲアルナの探偵とはおそらく別個のもの。
- (3) 二十一の秘名。
- (4) あるいは、「賢名なる〔神〕は、〔牛の〕足跡〔秘語〕の秘義を知りつつ語らず、後代の者の〔自覚を〕助長せんがために。」
- (5) 第一詩節の注参照。
- (6) 夜間の太陽を指す。ただし暗黒と訳した単語は、ソーマ草の意味にも解される。
- (7) おそらく天上の大海。
- (8) 上記一・二五・二二注記を見よ。なお次の讃歌参照。
- (9) 普通にはインドラの称呼。その場合、石は電撃を意味する。
- (10) 病氣に由来する水気を指す。
- (11) 五部族の民。ここでは全人類の意。

九 ミトラは神々および人間のあいだに、互いに好ましき掟に適う榮養を作れり、祭壇に草を敷く人（祭祀者）のため。

ミトラとヴァルナの歌

その一（五・六二）

一 汝ら兩神の堅固なる天則は、天則により蔽いかくされたり、太陽の馬の車より解かるるところに。十百（百の十倍）の「形態は」共に相集まれり。神々の驚くべき形態の中、最も美しき・かの唯一のものを、われは「靈感によつて」見たる。

二 こは実に、ミトラ・ヴァルナよ、汝ら兩神の偉大性なり。みづから静止しつゝ、牝牛たち（曙）は、日々その乳（光線）をいだす。汝らは「天界の」牧場のすべての「乳の」流れを溢れしむ。汝らに従いて、唯一の車輦（日輪）はこなたに転現せり。

三 汝ら兩神は、力によつて地と天とを支えたり、兩王者ミトラ・ヴァルナよ。汝らは植物を生長せしめよ。牝牛を乳もて溢れしめよ。雨を降らしめよ、生氣ある賜物に富む兩神よ。

四 いみじく繋かれし馬をして、汝ら兩神を運び来たらしめよ。手綱を執られて、彼ら（馬）はこなたに近づくべし。グリタ（バターの溶液）の衣裳（雨）は、汝らの後に従う。「天上の」河川（雨の源泉）は、遙けき「古の」日より「常に」流れ来たる。

五 名高く・巨大なる・「太陽の」形象を、そが自ら成長せんがため、「掟に」従ひ守りつゝ、——「祭官が」祭場の敷草を祭詞により守るごとく——固き意力をもつ兩神は、頂礼を受けて王座につく、ミトラよ、ヴァルナよ、供物の飲料の「並ぶ」あいだにおいて。

六 手に血ぬることなく、善業者のため遠方より保護する汝ら兩神は、——彼（善業者）を救はんことを、供物の飲料の「並ぶ」あいだにおいて——ヴァルナ（「ミトラ」）よ、王者として、激昂することなく、兩神相共に千本の柱もつ「王座に象徴せらるる」主権を振う。

七 「その王座の」柱は黄金に蔽われ、金属よりなり、馬の鞭のごとく、天に輝く、吉祥なる地にあるいは豊沃なる地にうち立てられて。われら願わくは、王座の上なる蜜のいくばくをかし得んことを。

八 金色の・金属の柱をもつ王座に、曙の輝くとき、太陽の昇るとき、汝ら兩神は登る、ヴァルナよ、ミトラよ。そこより汝らは無垢と有垢とを眺む。

九 最も強靱にして、貫き破らるることなき庇護により、いみじき賜物に富む兩神よ、間隙なき庇護により、万有の守護者よ、われらを援護せんことを、ミトラ・ヴァルナよ。われら願わくは、獲物を得んと欲するとき、常に勝利者たらんことを。

その二（五・六三）

兩神の雨を施す機能を最も明瞭に示す讃歌。暴風雨およびその通過後天日の再び輝く状態を描く。

一 天則の守護者よ、その掟の必ず実現する兩神よ、汝らは最高天において車に上る。ミトラ・ヴァルナよ、汝らがここに援護する者のため、天の雨は甘露をみなぎらす。

二 最高の君主として汝ら兩神は、正しく配分して万有を支配す、ミトラ・ヴァルナよ、太陽により見まもりつゝ。われらは汝ら兩神に賜物を乞う、雨と不死（活力）とを。雷鳴をとどろかす者（マルト神群）は、天地を馳せめぐる。

三 最高の君主・強力なる牡牛・天と地との主宰者・活潑に動くミト

ラとヴァルナとは、五彩に輝く雲を伴い、響きに応じて近づく。汝らは天をして雨降らしむ、アスラの幻力によりて。

四 汝ら両神の幻力は、ミトラ・ヴァルナよ、天に達せり。太陽は光明として、輝く武器として運行す。そを汝らは、雲により、雨によりて天界に隠す。バルジャニア（雨神）よ、汝の雨滴は蜜に満ちて降りきたる。

五 マルト神群は、快速の車を装う、美観を呈せんがために、ミトラ・ヴァルナよ、勇士が牛の掠奪に際してなすごとくに。雷鳴をとどろかす神群は、輝く空間を馳せめぐる。最高の君主（ミトラ・ヴァルナ）よ、天の乳液（雨）をもつてわれらを濡おせ。

六 バルジャニアは、輝かしき声を高くあぐ、榮養に富みかつ恐ろしき声を、ミトラ・ヴァルナよ。マルト神群は幻力により、雲を美しく身にとまどえり。「汝ら両神は、」赤らみて・汚れなき天をして雨降らしめよ。七 靈感にあふるるミトラ・ヴァルナよ、みずからの規範に従い、汝ら両神は掟を守護す、アスラの幻力によりて。天則により汝らは万有を支配す。色まばゆき車として太陽を天に安置す。

その三（七・六〇）

ミトラとヴァルナのみならず、アディティイならびに他のアーディティイ（アリアマン、ダクシヤ）に向けられている。

一 今日、スーリア（太陽神）よ、汝が昇りつつ、「われらを」罪なき者と、ミトラとヴァルナとに真実を告げんとするならば、——われら願わくは、神々の前に、アディティイ（「無垢」の女神）よ、「罪なからんことを」。われらは讃歌者として、アリアマン（「款待」の神）よ、汝の親愛たらんことを。

二 人間を見まもるかのスーリアはここに、ミトラ・ヴァルナよ、両

者（動・不動のもの）の上に、地の上に昇る、動かざるもの・動くものすべての守護者として、人間のあいだの直ぐなるもの・曲がれるものを眺めつつ。

三 彼（スーリア）は七頭の鹿毛の牝馬を、既よりいだして車に繋げり。これらの馬はグリタ（バターの溶液）を滴らしつつスーリアを運ぶ。彼（スーリア）は汝らに追隨して、ミトラ・ヴァルナよ、汝らの制定と「人間の」世代とを綜覧す、「牧人の」畜群におけるがごとく。

四 恩恵ゆたかに・蜜に富む汝ら両神の「馬たちは」現われたり。スーリアは明らけき「天上の」大水の上に昇れり。そがためにアーディティイ神群は道を開く、ミトラ、アリアマン、ヴァルナはともどもに。

五 これらの神々、ミトラ、アリアマン、ヴァルナは、実に多くの反則（天則に対する違反、虚偽）の復讐者なり。彼らは天則の座所において増大したり、能力ありて・冒さることなきアディティイの子らは。

六 これら冒しがたき神々、ミトラ、ヴァルナ、「アリアマン」は、その意力により、思慮なき者をも思慮あらしむ。いみじき思慮に富む賢察を吹きいれつつ、よき道により困厄をも越えて導く。

七 これら瞬きすることなき神々は、天よりも、地よりも「見まもりつつ」、みずから理解して思慮なき者を導く。河の奔流の中にも浅瀬は存す。神々はわれらをしてこの難所を通過せしめよ。

八 アディティイ、ミトラ、ヴァルナが、スダースに与うる・保護に富

(1) 最高の天界において、天則そのものに從つて、人間の眼から隠されている。

(2) 太陽としての天則の発現。

(3) 罪による無拘束と拘束、すなわち罪なきものと罪有る者。

(4) 単数、おそらくヴァルナを指す。

(5) 上記第三詩節に同じ。

(6) 祭官族ヴァンシユタ家の庇護者たる王の名。